

中国における高校日本語新人教師の不安についての事例研究

北京外国語大学北京日本学研究センター大学院生

陶 思 含

本研究は、高校の新人日本語教師が持っている不安および不安に対する自己変容過程を明らかにする。現在、中国国内の中等教育において、大学の外国語入試科目として英語の代わりに日本語を勉強する学生が少なくない。そのため、基礎教育の日本語教育は、決して軽視してはならない。

一方、高校の日本語課程標準の改定が行われ、教育観の更新や授業方法の改革が求められている。高校日本語教師の専門性の向上が求められている。

しかし、教育現場では、経験の浅い若い日本語教師の割合が少なくない。新人日本語教師はどのような不安や困難を直面しているか、どのような過程で教師として成長していくのか、考えていく必要があるだろう。

そのため、本研究は公立、私立高校に勤めている新人日本語教師それぞれ 1 名を対象とする。その 2 名に対してインタビューを行い、それぞれの不安構造を明らかにし、その変容過程を分析する。まだ研究の途中であるが、現段階の研究結果、「授業実践力」、「学生との関係」、「学校システム」に不安を持つことが明らかになった。その中、2 人とも授業実践力についてもっとも不安を持っていることが分かった。2 人が置かれた学校環境が違うため、2 人の不安構造も異なることが分かった。そして、変容過程について、いまだに授業において不安を感じているが、不安による影響はだんだん小さくなっている。振り返りによる自らの成長だけではなく、他人と話し合うことで、不安が減っていく可能性が示唆された。さらに、教師の成長において外部からさまざまなサポートが必要であることも示唆された。